

氏名	田中久美子
学位(専攻分野)	博士(教育学)
学位記番号	教博第50号
学位授与の日付	平成17年7月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	教育学研究科教育方法学専攻
学位論文題目	青年期女子の身体像と健康意識に関する心理学的研究

論文調査委員 (主査) 教授 子安増生 教授 吉川左紀子 助教授 楠見 孝

### 論文内容の要旨

本論文は、青年期の大学生の女子を対象として、日常の社会的な場面での自己の身体意識とそれに付随する諸行動について、行動尺度による評価ならびに実験的手法による行動観察に基づき、6つの実証的研究を通じて検討したものである。

第1章は、本論文の目的と理論的背景を説明する章であり、青年期女子の身体をめぐる諸問題に関する先行研究について文献展望を行った。身体的外見を重視する社会的な雰囲気が強まる中で、女子青年たちが痩せ志向の基調のもと、他者からの視線を過度に意識しながら、自己の身体像を歪めていく様相について概観した後、ダイエット行動に焦点を当てて検討した。特に、ダイエッター(ダイエット経験者)の持つ認知的傾向について説明する心理学的な理論と研究について整理した後、本研究の目的を示した。

第2章の研究1及び研究2では、被服に関する諸行動を取り上げ、自己に関するパーソナリティ要因との関連性について検討した。研究1では、被服に対する態度・関心を測定するための被服行動尺度を作成し、女子大生351人に実施したデータから、①気分依存性、②流行嗜好性、③同調性、④機能・経済性、⑤注目性の5因子を抽出した。次に、自己の諸側面と被服行動との関連性を検討し、公的自己意識が「気分依存性」および「流行嗜好性」と、自尊心が「気分依存性」「流行嗜好性」「注目性」と関連性することを示した。被服行動への影響の仕方が自尊心と容姿満足度の間で非常に類似していることも明らかにされた。研究2では、「同調性」の中の「相互依存的自己理解」に焦点をあて、その原因尺度を作成して大学生男女562人を対象に実施し、男女とも①主体性の欠如と②他者との調和の2因子を抽出した。自尊心は主体性の欠如を介して、他者との調和は流行嗜好性を介して、それぞれ同調性に影響を与えることが明らかとなった。

第3章の研究3及び研究4は、女性が容姿や外見についての社会的価値観にとらわれると、自己の容姿に対する他者の評価をより強く意識し、それを内在化していくとする Fredrickson & Roberts (1997) の自己対象化理論に基づく研究を行った。研究3では、容姿を意識しやすい衣服の着用と、それを評価する友人の存在による自己対象化の促進が、その後の被服行動と食行動に関する意識(羞恥心、不満感)に及ぼす影響について女子高校生165人を対象に検討した。研究4では、写真撮影のモデルを依頼されるという自我に脅威的な場面を与えることによって認知的負荷を操作し、負荷後の食行動にどのような影響が生ずるかについて、女子学生53人を対象に実験的に検討した。その結果ダイエッターは逃避行動として食の摂取量を増やしたが、非ダイエッターは現状を適切にモニターして食の摂取量を低く抑えることが示された。

第4章の研究5及び6では、ダイエット経験を①「非ダイエッター」、②カロリー計算や運動を中心とした「ダイエッター1」、③過激なダイエット法だが経験頻度の低い「ダイエッター2」、④その経験頻度の高い「ダイエッター3」に分類し、痩せた身体への強迫的なこだわりや自己の外見・容姿に対する過度の関心の心理的背景を探った。研究5では、女子学生170人を対象に、ダイエット飲料のCMの登場人物とその商品の評価を行わせ、「ダイエッター3」群の独特な高評価反応を取り出した。身近な友人との関係を調べた研究6(女子学生238人を対象)でも、「ダイエッター3」は、他の3群と異なり、自分を実際以上に太っていると認識し、友人に嫌われないために自己の外見に極めて配慮していることが示された。

第5章では、4章までの研究を総括した後、その結果を包括的に統合するモデルの構築を試み、青年期の自己の形成・発達という観点から、食行動とダイエット行動の持つ意味を考察した。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、青年期女子の身体像と健康意識を「被服行動」ならびにダイエットを中心とする「食行動」の2つの観点から、6つの実証的研究を通じて解明しようとしたものである。質問紙調査研究では、共分散構造分析などによる変数間の関係のモデルが示され、それと実験的手法による調査結果とのバランスが取れた構成となっている。

第1章では、衣服や体型のような外見への関心が女子青年にとって日常的に重要なテーマであるにもかかわらず、心理学の実証的研究が数少ないことに触れ、Fredrickson & Roberts (1997) の自己対象化理論を援用しながら、女子青年の身体像と健康意識を明らかにするという本研究全体の目的が示された。

第2章の研究1では、被服行動と自己の諸側面の関連について、質問紙調査法による研究を行った。女子大学生351人という十分なデータを取り、因子分析などで各尺度の信頼性と妥当性を確認した後、抽出された被服行動5尺度と自己意識の4尺度の関連性を共分散構造分析にかけ、自己意識が同調性と流行嗜好性を介して被服の気分依存性に影響を及ぼすことを明らかにした。続く研究2では、同調性の中の「相互依存的自己理解」に焦点をあて、その原因尺度を作成して大学生男女562人を対象に実施し、男女とも主体性の欠如と他者との調和の2因子を抽出した。自尊心は主体性の欠如を介して、他者との調和は流行嗜好性を介して、それぞれ同調性に影響を与えることを示した。

本研究の中心をなす被服行動と食行動は、ともすると相互に関連のないまま議論が進みかねないが、第3章の研究3において両者の関連性を押さえる実験が女子高校生165人を対象に行われた点が評価できる。すなわち、容姿を意識しやすい衣服の着用が自己対象化を通じてその後の被服行動と食行動に関する意識に及ぼす影響が示された。

研究4以後の3つの研究は、ダイエット行動を取り上げている。第3章の研究4は、女子学生53人を対象に、写真撮影という認知的負荷を与えることが、その待機中に勧められたチョコレートの消費量に影響することが巧妙な実験手法によって示され、身体意識と食行動の関連性について、自己対象化理論による解釈の妥当性が確認された。

第4章の研究5と6では、女子学生（研究5は170人、研究6は238人）を対象とし、ダイエットの経験内容をクラスター分析を用いて4群に分類し、「過激なダイエットを行う群」がダイエット飲料のCMの内容や登場人物を好意的に評価すること（研究5）、友人への意識が身体像とダイエットのあり方をつなぐ重要な媒介変数になっていること（研究6）を示した。十分なデータ数に基づくこの2つの研究から、ダイエット経験を4群に分けることの妥当性と、「過激なダイエットを行う群」の心理の特異性が示されたことは意義深く、また本研究が提案したダイエット経験の分類法は今後の応用性と発展性がある。

最後に、第6章では、以上の6つの研究の結果から、青年期女子の身体意識に関する心理学的モデルの提案と、それが健康教育に及ぼす影響を論じている。

本研究に対して、(1)女子青年の特徴を論ずるには、男子青年や中年期女性との比較が必要であること、(2)テクニカルな問題として、因子分析を直交回転（バリマックス法）で行っているが因子間相関をみるには斜交回転が望ましいこと、などの問題点を指摘しうる。しかしながら、これらの点は重大な瑕疵ではなく、本研究の結果は教育認知心理学の発展にとって重要な知見を生み出しており、高く評価すべきものである。

よって本論文は、博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成17年5月23日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。